

ホセア書12-14章「主の愛の中に立ち返る」

1A 初めの頃 12

1B ヤコブの力 1-6

2B エジプトの頃からの神 7-14

2A 神の他にない救い 13

1B 罪の中に死ぬエフライム 1-8

2B 奪い取られる王 9-16

3A 主に立ち返る民 14

1B 唇の果实 1-3

2B 背信の癒し 4-9

本文

ホセア書 12 章を開いてください。私たちはホセア書の最後の三章を見ていきます。振り返れば、私たちが 1-3 章にて、預言者ホセア自身が姦淫の女ゴメルを娶ったところから読むことができました。彼女が他の男のところいき、ついに奴隷市場で売られていたところでホセアが買い取り、もう他の男のところに行ってはならないと言いました。その背信行為は、北イスラエルが神ご自身に行われていたことでした。そして 4-7 章において、主なる神が聖なる方であることが示されていました。彼らがバアルの神にはまってしまうのですが、そのような偶像礼拝や忌まわしい行為を、主はよしとすることはできない、受け入れられないということです。そして 8-10 章において、主が公正な方、裁かれる方であることを見ました。アッシリヤが彼らの金の子牛の宮を打ち滅ぼすことによって、自分たちのしていることに対して正しい報いを与えられる方であることが描かれています。主が聖なる方であり、そして正しい神であるということです。

しかし、神はそれでも彼らを見捨てられない。その神の痛み、神の愛が 11 章から 14 章までに書かれています。主の感情が最も表れている言葉を読みます。「11:8-9 エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができようか。どうしてわたしはあなたをアダマのように引き渡すことができようか。どうしてあなたをツェボイムのようにすることができようか。わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。わたしは燃える怒りで罰しない。わたしは再びエフライムを滅ぼさない。わたしは神であって、人ではなく、あなたがたのうちにいる聖なる者であるからだ。わたしは怒りをもっては来ない。」これは、まさに父親が愛する子に対して抱いている心です。どんなに不従順で、背信の罪を犯していたとしても、それでも見捨てられないという心です。

そして 12 章ですが、これは 11 章の最後の節、12 節からの続きになるのでそこをまず読みま

す。「わたしは、エフライムの偽りと、イスラエルの家の欺きで、取り囲まれている。しかし、ユダはなおさまよっているが、神とともにあり、聖徒たちとともに堅く立てられる。」主のもとに帰って来るといふ真実とは裏腹に、今のエフライムは偽りと欺きで取り囲まれていると言われています。それがなんであるかが次に書いてあります。

1A 初めの頃 12

1B ヤコブの力 1-6

12:1 エフライムは風を食べて生き、いつも東風を追い、まやかしと暴虐とを増し加えている。彼らはアッシリヤと契約を結び、エジプトへは油を送っている。

風、東風というのは、アッシリヤのことです。エフライムは、自分を虐げているアッシリヤにむしろ同盟を結んで、それで自分が守られようとしてしました(2列王 15:19-20)。多額の銀をアッシリヤに渡したので、国内で資産家から銀を供出させました。こうやって、まやかしと暴虐を増し加えたのです。ところが、もっと酷いのはアッシリヤに額ずきながら、エジプトにも貢物を持って行ったのです。北イスラエルの最後の王ホセアが、使いをエジプトに遣わしたことがアッシリヤに知られて、それでアッシリヤがサマリヤを包囲、陥落させたのです(17:4-5)。

なんで、こんな愚かなことを行なったのか？ 私たちは不思議になるかもしれませえんが、個人レベルに落とせば分るでしょう。自分に負い迫っている力があります。そこにいれば、自分がだめになると分かっている、それでも背いたら大きな制裁を加えられると恐れて、従うのです。けれども、機会があれば、他に力があるものがあればそちらに頼りたい、そしてそこから抜け出したいと思うのです。個人生活でも、エフライムがしているような二股外交は存在するのです。けれどもそこに、決定的な過ちがあり、それは自分を救う唯一の方、主のところに立ち返らなかったということです。

12:2 主は、ヤコブを罰するためにユダと言い争う。ヤコブの行ないと、そのなすことに応じて、主は彼に報いる。12:3 彼は母の胎にいたとき、兄弟を押しのけた。彼はその力で神と争った。12:4 彼は御使いと格闘して勝ったが、泣いて、これに願った。彼はベテルで神に出会い、その所で神は彼に語りかけた。12:5 主は万軍の神。その呼び名は主。

預言者ホセアは、イスラエルの民に彼らの始まり、そのルーツについて思い起こさせています。自分たちの父祖ヤコブに、自分で何とかしようとする力を持っていたことです。ヤコブは、主に愛され、選ばれていたのにも関わらず、問題が起こった時に、主のところに立ち戻るのではなく、自分の力で対処しようとしていました。しかし、神ご自身がその憐れみのゆえに、彼の力を取り除き、彼が泣いて願った時に、力強い方として、万軍の主として現れてくださったのです。彼のびっこを引いている弱さの中に、エサウの心を変えた神の力が現れたのです。

12:6 あなたはあなたの神に立ち返り、誠実と公義とを守り、絶えずあなたの神を待ち望め。

ヤコブは、エサウを通して心の葛藤に向き合った後、最後には、かつて天のはしごの夢を見たベテルに戻ることができました。ホセアの預言では、ベテルが「ベテ・アベン」と言い続けられていました。悪の家、と呼ばれていたのです。そこに金の子牛があったからです。けれども、そこは元々、神の家でした。主のところに立ち返れば、そこに主が初めからの憐れみをもって現れておられるのです。エペソの教会にイエス様が、「初めの愛に戻りなさい。」と言われたように、です。

主のところに立ち返れば、そこには、「誠実と公義」があります。主にある憐れみ、また正しさがあります。それをしっかりと守ることを促されます。そして、「絶えずあなたの神を待ち望め」とあるように、忍耐強く主が成し遂げてくださるのを待つのです。私たちはとかく、物事がうまく行っていないように見ると、自分で何とかしなければいけないと思って、あれこれ行なってしまいます。けれども、ヤコブの生涯を見てください。彼があれこれ考えて、いろいろ動いている中で、結局、神が主権をもって、恵みをもって、彼を祝福しておられたでしょう！神は、私たちに関わらずご自分の恵みのわざを行なってくださるのです。矛盾する言葉ですが、「不完全な器を通して完全な働きを行なわれる」のです。自分自身の、また他の人たちの不完全さ、欠けを見て、完全な方のところに行かないこと、これこそが自分の力で生きて行こうとする最も大きな罪です。

2B エジプトの頃からの神 7-14

12:7 商人は手に欺きのはかりを持ち、しいたげることが好む。12:8 エフライムは言った。「しかし、私は富む者となった。私は自分のために財産を得た。私のすべての勤労の実は、罪となるような不義を私にもたらさない。」

次に問題にしているのは、欺きの量りです。「商人」とありますが、これは直訳するとカナン人です。周囲の住民が普通に行っていたことですが、誠実と公義を守るように召されたイスラエルの民が、自分の豊かさの源を忘れて、そうした姑息な方法で富を得ていました。そして、もちろんその欺きによって被害をこうむる人々は沢山出て来るわけです。主のところに行かなければ、自分で何とかしてやろうとしているから、少しずつ誤魔化すようになります。けれどもエフライムは、「これだけ勤労の实があるのだから、私たちが何か悪いことをしたのではない。」と言っています。これぞ、繁栄の神学です。「豊かにされているということは、祝福の証拠であり、そうでなければ問題がある」という考えです。うまく行っていれば、それは正しい事をしている証拠で、悪いことが起こっていれば、それは悪いことをしているからという考えです。

12:9 しかし、わたしは、エジプトの国にいたときから、あなたの神、主である。わたしは例祭の日のように、再びあなたを天幕に住ませよう。

主は、再び彼らのルーツを思い起こさせておられます。彼らが神に選ばれた、神の所有の民であることは、彼らがエジプトで奴隷生活をしていて、そして、荒野において天幕生活をしていた時からそうだったのです。彼らの源は、そのような惨めな状況があっても、それでも共におられた主のご臨在であります。この方こそが神であり、主です。ここで主が言われている、「例祭の日」というのは、おそらく仮庵の祭りのことでしょう。家から出て、仮の庵を作って半分野宿するようにして、それで荒野の生活で主が守り導いてくださったことを、思い起こすのです。今、エフライムは豊かにされていますが、主がその定住生活を壊して、初めの愛に立ち戻らせるべく、アッシリヤに捕囚の民とせしめると言われているのです。

12:10 わたしは預言者たちに語り、多くの幻を示し、預言者たちによってたとえを示そう。

エフライムまたは北イスラエルにとって、厄介な存在は、預言者でした。9章7-8節に、預言者や見張り人を、ひどく憎んでいる彼らの姿を見ます。なぜなら、彼らの宗教制度が神によってではなく、自分で勝手に作り上げたものだったからです。見た目にはそれなりにしっかりしているし、主の御名を呼んで礼拝していますから、預言者たちの語る言葉は彼らの熱心さを真っ向から否定する内容だったのです。それで、憎しみが向けられました。けれども、私たちの献身や礼拝が、神の真理に基づくものでなければ、ホセアが繰り返し語っているように、「風のようなもの」なのです。中身がない、命がないものなのです。

ホセア書には、数多くの聖書ゆかりの地、聖書の有名な出来事が出て来ます。また、エフライムの背信について、いろいろな喩えや表現を使って語られています。こうした預言の言葉を聞くことによって、初めて彼らが主に立ち返ることができるということです。

12:11 まことに、ギルアデは不法そのもの、ただ、むなしい者にすぎなかった。彼らはギルガルで牛にいけにえをささげた。彼らの祭壇も、畑のうねの石くれの山のようになる。

「ギルアデ」はヨルダン川の東岸で、死海とガリラヤ湖の間にある地域です。ヤコブが主と格闘したベヌエルもギルアデにあります。ガド族やマナセ半部族の相続地でもあります。彼らが、約束の地を渡る前に、「ここでは牛や羊の放牧に適したところですから、ここに割り当て地をください」と言ったところから、その豊かさがあつたのでかえって偶像礼拝に陥りました。そして「ギルガル」は、ヨシュアたちが約束の地に入ったところ、自分自身を聖別をしたところから、サウルが王として任命を受け、またアマレク人を聖絶せよと命令されたのに守らないで、祭壇を造ったところでもあります。この地域もアッシリヤによって荒らされ、祭壇も打ち壊されます。

12:12 ヤコブはアラムの野に逃げて行き、イスラエルは妻をめとるために働いた。彼は妻をめとるために羊の番をした。12:13 主はひとりの預言者によって、イスラエルをエジプトから連れ上り、ひ

とりの預言者によって、これを守られた。

再び、ヤコブの生涯を思い起こさせています。神に愛され、選ばれていたヤコブは、とても身分の低い仕事をしていました。ギルアデからさらに北にアラム地方があります。そこで、妻をめとるために合計 14 年働き、仕事の条件を変えられてさらに 6 年間そこで働かされました。その中にある神の恵みがあるのです。それから、出エジプトについて語ります。エジプトにいる時から神は、彼らにとって神だったのですが、預言者によってそこから連れ出され、守られました。預言者の存在が必要なのだよ、という呼びかけです。

12:14 エフライムは主の激しい怒りを引き起こした。主は、その血の報いを彼に下し、彼のそしりに仕返しをする。

主が愛してやまない、ということと、主が怒りを持っておられるということは、両者があって初めて私たちの神であります。怒りというのは、正義といってよいでしょう。裁判官が判決で刑罰を読み上げる時です。正義が執行されることであります。エフライムが罪を犯し、偶像礼拝をし、そして幼子たちを火の中に通らせることによって血を流しました。それを主がそのままにしておくことはなされません。アッシリヤによって殺されるという報いを受けました。そして、神の民であるのにそのような忌まわしいことを行なって、御名にそしりを与えましたが、それに対しても報いを与えられます。

2A 神の他にない救い 13

1B 罪の中に死ぬエフライム 1-8

13:1 エフライムが震えながら語ったとき、主はイスラエルの中であがめられた。しかし、エフライムは、バアルにより罪を犯して死んだ。13:2 彼らは今も罪を重ね、銀で鑄物の像を造り、自分の考えで偶像を造った。これはみな、職人の造った物。彼らはこれについて言う。「いけにえをささげる者は子牛に口づけせよ。」と。

エフライムには、主があがめられた歴史を持っています。ヨシュアたちが約束の地に入り、エリコ、そしてアイの町を攻略した後、エフライムのシェケムというところに行きました。そこには、エバル山とゲリジム山があり、それぞれが向き合っているようなところにシェケムがあります。そこに主の祭壇をたてます。そして、モーセの律法の書を読み上げました。エフライムは地理的に、全イスラエルの中心にあるので、そこで主があがめられたのです。震えながら語ったというのは、律法にある神の畏れ多き姿、偉大な、力ある姿に震えていたのです。ところが、彼らがバアルの罪を犯して、その律法に書かれてあるように罪の中で死んだのです。そして金の子牛に口づけ、つまり額ずき、ひれ伏しなさいと命じたのです。

13:3 それゆえ、彼らは朝もやのように、朝早く消え去る露のように、打ち場から吹き散らされるも

みがらのように、また、窓から出て行く煙のようになる。

偶像礼拝が、いかにはかないものかを、朝靄、露、もみ殻として言い表しています。

13:4 しかし、わたしは、エジプトの国にいたときから、あなたの神、主である。あなたはわたしのほかに神を知らない。わたしのほかに救う者はいない。13:5 このわたしは荒野で、かわいた地で、あなたを知っていた。13:6 しかし、彼らは牧草を食べて、食べ飽きたとき、彼らの心は高ぶり、わたしを忘れた。

再び、主は彼らの始まりを教えられます、「エジプトの国にいたときから、あなたの神、主である」であります。神の所有の民となったということは、この神以外に自分を救う存在はないのだということです。他の道はあり得ないのです、選択肢はないのです。そして、事実、神は助けてくださいます。荒野の旅で喉が渇くような時にも神は親しく彼らのことを知っておられました。私たちにとっての霊的な挑戦は、エフライムが受けていたものと同じです。約束の地に入って、「牧草を食べて、食べ飽きたとき」であります。豊かにされた時に、その豊かさに抛り頼むようになってしまうことです。

キリスト者が罪の生活から贖い出されました。救われました。ところが、救われたことによって、なぜか自分の中に何か良きものがあると思って、御霊ではなく肉の力によって完成させようとするのです。恵みによって救われたのですから、恵みの中に生きるしか方法がないのです。ところが、自分が道徳的に良い人間になることをいつの間にかキリスト者生活にすり替えて、それで良い人間になろうとします。そういった人々は、イエス様が金持ちの青年と話されて、彼が悲しい顔つきで去っていったのと同じように、心の中に偶像があります。自分で自分のことをしなければいけないという高ぶりの心が、放置されているからです。そうすれば、必ずつまずいてしまいます。

13:7 わたしは、彼らには獅子のようになり、道ばたで待ち伏せするひょうのようになる。13:8 わたしは、子を奪われた雌熊のように彼らに出会い、その胸をかき裂き、その所で、雌獅子のようにこれを食い尽くす。野の獣は彼らを引き裂く。

獅子、豹、熊、獅子による攻撃ですが、ありったけの獐猛な獣を挙げておられます。アッシリヤによる攻撃を差しています。思い出せますか、この四頭、ダニエル書 7 章に出て来た、バビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマに対しても使われた獣です。主がここで言われていることは、主ご自身の愛と養いの中から自ら離れ、戻ることを拒むのであれば、主はこのような獐猛な獣の攻撃にさらされるままに置かれるということです。

2B 奪い取られる王 9-16

13:9 イスラエルよ。わたしがあなたを滅ぼしたら、だれがあなたを助けよう。13:10 あなたを救う

あなたの王は、すべての町々のうち、今、どこにいるのか。あなたのさばきつかさたちは。あなたがかつて、「私に王と首長たちを与えよ。」と言った者たちは。13:11 わたしは怒ってあなたに王を与えたが、憤ってこれを奪い取る。

主以外によって、自分たちが助かる道があると考えることが、本当にできるのか？という問いかけであります。神の国とその義を第一に求めなさいと言われているのに、その他のものを第一にして、神に願うのは後付けということがよくあります。けれども、イスラエルの民は周囲の人々がやっているんだから、ということで、人間の王を求めました。私たちも、力があって、安心できるようなものを求めます。生命保険のようなもの、預金通常のお金、権威あると言われている人の言葉など、これなら大丈夫だと安心できるものを求めます。けれども、イスラエルの話に戻すと、サウルが彼らを救ったでしょうか？その後、歴代の北イスラエルの王たちが彼らを救ったでしょうか？彼らはもういないのです。ヤロブアム二世の王たちはことごとく耐えていきます。サウルが王となることは神の不本意でしたが、それを許されました。そして今、人間の力に依存していた彼らから、その人間の力を取り除かれます。

13:12 エフライムの不義はしまい込まれ、その罪はたくわえられている。13:13 子を産む女のひどい痛みが彼を襲うが、彼は知恵のない子で、時が来ても、彼は母胎から出て来ない。

エフライムの人たちを、今、私たちがタイムマシンに乗って観光のようにして訪問したならば、「ええ、別にいいんじゃないの？」と思われる生活をしていたかもしれません。けれども、暗闇の業は隠されていたのです。タブー視されていたのです。これは無いようにしないといけないというものです。だから、どんどんその罪は蓄えられていきます。しかし、主はそこから抜け出す道を預言者たちを通して示してくださいました。しかし、出て来ません。それを母の胎から産道があるのに、そこから出てこようとしない赤ん坊のようだという事です。

13:14 わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。

この新改訳の初めの言葉は、文脈から反語的な問いかけではないかと思われます。口語訳では、「わたしは彼らを陰府の力から、あがなうことがあろうか。彼らを死から、あがなうことがあろうか。」となっています。新共同訳は、「陰府の支配からわたしは彼らを贖うだろうか。死から彼らを解き放つだろうか。」とあります。エフライムが死ぬことを免れることはできようか？という問いかけです。このままではできません。死による苦しみ、陰府の中に入る苦しみが彼らを待っているということです。そして主は、「あわれみはわたしの目から隠されている。」と言われます。主は敢えて、この時はご自分の憐れみを見せないということです。しかし、無くしたということではありません。ここが神の痛みになります。神は正しい方ですから罰せざるをえないのですが、憐れみ深い方です

から、見捨てることはできません。これが、罪について自分自身のことも、また他者のことも、私たちは痛みと傷をもって対処するのです。

ところで、ここのホセア書をパウロがコリント第一 15 章、復活を教えている所で引用しています。「15:54-57しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」ホセアの預言の中では、エフライムが死から免れない文脈で語っていますが、パウロはその後にある福音について話しています。ホセア書 14 章において、彼らが新しく命を取り戻す希望が語られていますが、パウロもその路線でホセア書を引用しました。死んだ後の復活の希望です。死の棘である罪がありますが、主イエス・キリストによって復活の命の勝利を与えられました。

13:15 彼は兄弟たちの中で栄えよう。だが、東風が吹いて来、主の息が荒野から立ち上り、その水源はかれ、その泉は干上がる。それはすべての尊い器の宝物倉を略奪する。13:16 サマリヤは自分の神に逆らったので、刑罰を受ける。彼らは剣に倒れ、幼子たちは八裂にされ、妊婦たちは切り裂かれる。

エフライム族が兄弟たちの中で栄えているけれども、主がアッシリヤという東風を吹かせるということです。聖書には、神との命ある関係を「水源、泉」と形容します。それが吹き飛ばされますよ、ということ、裁きがあるということです。そして、それが、幼子が八つ裂きにされ、妊婦たちが切り裂かれるという惨い裁きなのだということでもあります。

3A 主に立ち返る民 14

1B 唇の果実 1-3

14:1 イスラエルよ。あなたの神、主に立ち返れ。あなたの不義がつかずきのもとであったからだ。

そうです、「あなたの不義がつかずきのもと」であります。私たちは、心の中でどうにかして、「これこれをすれば、うまく行くはずだ」という思いを持って、自分の心にある不義を隠し、自分も見ないようにして生きています。けれども、自分が躓くのは、やはり自分の不義なのです。しかし、私たちはどうにかしてその真実から逃げたくなくなります。ですから、ホセア書においても、また他の預言書や聖書の箇所においても、神によって回復する姿は後の後に出て来ます。それだけ、私たちのうちにある不義は、逃げて、逃げて、隠れようとするのですね。

主が悔い改めを促されます。悔い改めというのは、「あなたが持っている重荷を置いてしまいなさい。そしてわたしの慈しみの中に飛び込みなさい。」という呼びかけです。「あなたの神、主に立ち

返れ」は、単に主のところに立ち返れという方向を示しているのではないのだそうです。「もっと深く、もっと親しく、主のふところに届くように立ち返る」ことを求めています。「主に」ではなく、「主のもとに」訳すべきだということです。新共同訳には、「イスラエルよ、立ち帰れ／あなたの神、主のもとへ。」と訳されています。¹

14:2 あなたがたはことばを用意して、主に立ち返り、そして言え。「すべての不義を赦して、良いものを受け入れてください。私たちはくちびるの果実をささげます。14:3 アッシリヤは私たちを救えません。私たちはもう、馬にも乗らず、自分たちの手で造った物に『私たちの神』とは言いません。みなしごが愛されるのはあなたによってだけです。」

これまで、エフライムは数多くのものを捧げていました。けれども、それらは神にとって最も悲しむべき偶像へのいけにえでした。しかし彼らは今、「良いものを受け入れてください」と言っています。それは、「すべての不義を赦」していただいた後に出て来る、くちびるの果実です。ここの「果実」というのは、「雄牛」というのが直訳ですが、唇をもって神への感謝と賛美を、雄牛を捧げるように、いけにえにするということが、良いものであります。「ヘブル 13:15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」

そして彼らは三つの告白をします。一つは、アッシリヤのような力を持つ国があっても、それには頼れないこと。そしてもう一つは、馬のように武力には頼れないこと。そして三つ目は、偶像には頼れないことです。

2B 背信の癒し 4-9

14:4 わたしは彼らの背信をいやし、喜んでこれを愛する。わたしの怒りは彼らを離れ去ったからだ。

ついに、慰めの言葉が与えられます。「彼らの背信をいや」すと言われます。そうですね、私たちの不義、神から離れようとする背信は、病気のように、不治の病のように直りません。けれども、主は見捨てられません。あきらめません。私たちが主の愛のふところに飛び込み、不義を赦していただく時に、主は背信という病を癒してくださるのです。そして、主が喜んでおられるのは、この癒しです。主は正しい人が来ることを願っておられるのではなく、罪人が悔い改めるのを喜びとしておられます。私たちは正しくなった自分を神の前に持って行こうとしますが、神は不義が自分にあることを認めて、癒しを求める人々を喜ばれます。

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E6%AE%8B%E3%81%95%E3%82%8C%E3%81%9F%E4%B8%80%E7%B8%B7%E3%81%AE%E6%9C%9B%E3%81%BF>

そして、ここの「愛する」という言葉が、アハブというもので、アハバという死海クリーム（注）の銘柄になっているものであり、「愛している情熱」を表しています。ヘセドがもっと「慈しみ深さ、真実な愛」であるのに対して、アハバは慕っている、好んでいるという恋愛に近い言葉です。「申命 7:7-8 主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたがたを贖い出された。」これが、神の愛なのです。数が少ない民族、簡単に言うと「しょぼい」のです。けれども、力強い神はこのような、つまらない、力なき存在を理由なしに、神は大好きなのです。恋い慕っておられるのです。計算や損得で考えたら、こんな問題を抱えるのだったら、付き合いなければいい！となります。だから、聖書はややっこしいのです。神の、クレイジーな愛、罪深い者を決して見放さず、見放さないだけでなく、不義から立ち直らせるところまで付き合う方なのです。

14:5 わたしはイスラエルには露のようになる。彼はゆりのように花咲き、ポプラのように根を張る。
14:6 その若枝は伸び、その美しさはオリーブの木のように、そのかおりはレバノンのようになる。
14:7 彼らは帰って来て、その陰に住み、穀物のように生き返り、ぶどうの木のように芽をふき、その名声はレバノンのぶどう酒のようになる。14:8 エフライムよ。もう、わたしは偶像と何のかかわりもない。わたしが答え、わたしが世話をする。わたしは緑のもみの木のようだ。あなたはわたしから実を得るのだ。

イスラエルのような乾燥した地は、その湿気は朝露の露が大きな役目を果たします。露のおかげで、花が咲き、根を張ります。ところで、「ポプラ」と訳されていますが、直訳はレバノンです。新共同訳は、「レバノンの杉のように根を張る」とあります。そして、霊的にもそうですが、イスラエルの地がそのように回復して、エフライムの人たちも真実に、その名のごとく実り多い者たちとなります。その陰に住み、生き返ります。芽を吹き、名声も拡がります。その源が、主ご自身だからです。主が答えてくださり、主が世話をしてくださいます。主がもみの木のようになり、その力と權威の庇護の中で守られます。

14:9 知恵ある者はだれか。その人はこれらのことを悟るがよい。悟りある者はだれか。その人はそれらを知るがよい。主の道は平らだ。正しい者はこれを歩み、そむく者はこれにつまずく。

そうですね、主の恵みを受けて、その中に育っていく中で知恵とは何か？まっすぐに歩むことです。「平ら」と訳されているのは、「まっすぐ」という意味で、それが「正しい」の元々の意味になっています。そこに歩むことで、そうでないとつまずきます。